メルロ＝ポンティにおける自己変容の契機としての言葉

柄澤　郁子

1．はじめに

言葉のやりとりにおいて、その言葉の伝達内容や概念的意味だけではなく、むしろその文脈や背景というものが重視されているということは、たとえばナラティヴ・アプローチにおいても[1]、精神病理学などにおいても当然考慮されてきたことである。

モーリス・メルロ＝ポンティ(Maurice Merleau-Ponty 1908-1961)においても、「概念的意味」よりもむしろ「所作的意味」が重視されているが、さらに彼の哲学においては、その言葉のやりとりということ自体が、言葉を発する側、受け取る側双方における変容の契機として考えられているのではないだろうか、ということが本稿において確認されるべきこととなる。

メルロ＝ポンティにおいては徹底して身体というところに基点をすえた現象学の方法論において、実際の場における自らと他者との関係について考察されている。といってもここで問題にしたいのは言葉と身体の乖離や二元性、あるいは言葉に対する身体の優位性ということではもちろんない。それどころかメルロ＝ポンティにとっては言葉とは身体なのであり、最期まで言葉の可能性について追究し続けていたと言っても過言ではないであろう。

一方、メルロ＝ポンティの哲学には「他者」「他なるもの」がなく、言葉のやりとりとはいっても結局はその言葉はモノローグにすぎないとする議論も多い[2]。しかしたとえば屋良は「メルロ＝ポンティが「他者との対話」や「他者への語りかけ」を軽視していたというのは事実に反する」として、その他者へのまなざしについて詳細に論じており[3]、また中田はむしろメルロ＝ポンティの哲学によって、自我の自立性を意味するあり方ではなく、自分にそなわる本質的な弱さゆえに他なるものへの感受性が開かれ、それによって自らを豊かにするというあり方が明らかになるとする[4]。

本稿では大きなテーマである届く言葉について考察する一つの手がかりとして、主にメルロ＝ポンティの前期の主著『知覚の現象学』に寄り添いつつ[5]、言葉を届けようとする主体（第二節）、そして言葉を聴き取ろうとする主体（第三節）の言葉について検討し、その上で中期以降の考察を参照しながら自己変容のありかたについて検討を加え（第四節）、結びにかえて「言葉による自己変容」について検証していく（第五節）。

2．　語る主体

（1）　語る言葉

本稿で検討される言葉は基本的には対話における言葉、つまり音声言語ということになる。

メルロ＝ポンティにおいて言葉は、生理学的、物理学的な一現象となって与えられた刺激によって呼び出されるもの（経験論の心理学の見解）ではなく、また内面的な認識の単なる外面的標識にすぎないもの（主知主義の見解）でもなく、「（言葉は）思惟の着物ではなくて、思惟の徴表または思惟の身体とならねばならない」(PP212/①299)[6]という。言葉が概念的内容を指し示す記号にすぎないという考え方がはっきりと否定され、まず言葉には「語る主体」(PP203/①286)が存在するということが重要であり、「言葉自体が意味を身に帯びて」(PP207/①292)いるのであり、「言葉は、言葉を語るものにとって、すでにできあがっている思想を翻訳するものではなく、それを完成するもの」(PP207/①293)であるとされている[7]。

すでにできあがった概念なり思想なりがあってそれを表すものとして言葉が発せられるのではなくて、むしろそのつど生みだされる言葉によってこそ思想が完成されるというのである。そのつど生みだされる言葉が「語る言葉 parole parlante」(PP229/①321)であり、そこから獲得された既得の言葉、つまり「語られた言葉 parole parlée」(ibid.)とは区別される。「表現を通じてこそ、思惟はわれわれの思惟となる」 (PP207/①292)とも述べられている。

そして「意味」については「語の概念的意味なるものは、もともと言葉そのものに内在している所作的意味を土台として、それからの控除として形成されたもの」(PP209/①294)であるとされる。

（2）　言葉が纏う意味

「言葉自体が意味を身に帯びて」いるとメルロ＝ポンティが言っているのは、言葉にすでに概念として定まった意味が内在しているということではもちろんない。そうではなくて、言葉が発せられるごとに意味が分泌され、それが言葉に纏わるということである。

メルロ＝ポンティは『知覚の現象学』においてこの意味の分泌ということについて次のように語っている。

「（自己の身体が）どこから自分にもたらされたわけでもない一つの＜意味(sens)＞を自分自身で分泌して、それを自分の物質的周囲に投げ出し、それを受肉した他の主体たちへと伝達するのが見られる……身体こそがみずから示し、身体こそがみずから語るということ」(PP 230/①323)

上記の引用にあるように、メルロ＝ポンティにとっては身体というものがみずから意味を分泌し、それを他の主体に伝達するものである。

「身体はむしろ他の一切の表出空間の根源であり、表出の運動そのものであり、それによってはじ

めて意味が一つの場所を与えられて外部に投射され、意味がわれわれの手元に、われわれの眼下に物として存在しはじめるようになる」(PP 171/①245)

意味を分泌する身体は「他の一切の表出空間の根源」としての場である。しかし同時に「表出の運動そのもの」でもある。意味が生まれる場であるのと同時に、意味が生み出される運動そのものでもあるというのである。

そして言葉における意味とは、語る主体の身体から分泌される意味である。語る言葉の意味、については次のように述べられている。

「手もちの意味、つまり過去の表現行為の集積が、語る主体たちのあいだにひとつの共通の世界を確立しており……そして言葉の意味(sens)とは、その言葉がこの（共通の）言語世界を使いこなす仕方、あるいはその言葉が既得の意味というこの鍵盤の上で転調する仕方、以外の何ものでもない。」(PP 217/①306)

過去の表現行為の集積により作り上げられた共通の言語世界である「既得の意味というこの鍵盤」、つまり「語られた言葉」の上で「語られた言葉」を駆使しつつ「語る言葉」が変容して生み出されていく、というよりもむしろ「語られた言葉」がその場で転調し変容するなかで「語る言葉」がうまれる。その転調する、変容する仕方こそが言葉の意味である。この転調する仕方とは、まさに語る主体の、その場で生みだされつつある所作そのものでもある。

「所作的意味」とは、第一に身ぶりによる意味であるが、それは身体的な動作から生み出されるものに限られるわけではない。身ぶりや声に醸し出される表情や息遣いでもあり、さらに表情をうみだす感情、すなわち「情動的意味」でもある。たとえば怒りのような感情は「所作の背後に隠れている一つの心的事実」(PP215/①303)ではなく、「所作は私に怒りのことを考えさせるのではなく、怒りそのもの」(ibid.)だとされているが、つまり所作自体が情動そのものでもある。第二に、「所作的意味」は言葉にすでに内在しているものでもあるとされる。たとえば霰（あられ）という言葉はその物質的な特性によってつくられたものではなくて、メルロ＝ポンティにとってはまず、「空からすっかりできあがって降ってきたこの固く、もろく、水に溶けやすい粒々のまえでの私の驚きのこと」(PP462/②296)なのである。

「所作的意味」はその場において生みだされるものであるが、聴きとる相手に向けて言葉が選ばれ紡ぎだされるときにはその言葉に内在する所作的意味がその場で生みだされる意味と響きあう。響きあうからこそ、その言葉が浮かびあがってくるともいえるのである。

（3） 意味をうみだす操作としての実存

それではメルロ＝ポンティにとってそもそもなぜ「所作的意味」が「概念的意味」の土台となると位置づけられるのだろうか。それには彼の実存(existence)の捉え方が関わってくる。

メルロ＝ポンティは、まずは「それ自体では意味を持たなかったものが意味を持つようになり、…偶然的なものが理由あるものになる――こうしたことを可能にする操作こそがすなわち

実存だからであり、実存とは事実的状況の引き受け」(PP197/①279-280)であるとする。意味を持たなかったものが意味を持つように捉えなおされていくことを可能にする操作こそが、事実的状況の引き受けとしての実存（existence）であるというのである。

メルロ＝ポンティにおいて実存とは、「事実や偶然を不断に己がものとしてゆく運動」(PP148/①216)であり、またそれはなによりも「身体のなかに己れを実現する」(PP193/①274)ものである。事実や偶然を自分のものにしていくために、身体において自らがそれらを受け取り捉えなおしていく運動そのものが実存なのである。そうした捉えなおしの運動のなかで紡ぎだされる言葉はすでに得られている共通の言葉を使用しそのうえで新たに生みだされるにしても、その意味は聴きとろうとする相手を目の前にして、概念的意味ではなくその場における情動が身体において形となる意味、つまり所作的意味こそがまず土台となる、ということなのである。

本節における考察を語りなおすならば、まずメルロ＝ポンティにおいて言葉は概念的意味を指し示す記号ではなく、むしろそのつど生み出される言葉によってこそ思想が完成される。事実的状況を引き受ける不断の捉え直しの運動としての実存は、身体のなかに己れを実現するものであり、身体は真剣に語りだす言葉のなかに、所作的意味であり情動的意味であるような意味を分泌する。共通の言語世界である既得の意味の鍵盤の上で、その場において、意味をまとった言葉が生み出されるわけであるが、その生み出される際の転調の仕方、変容の仕方こそが言葉の意味でもある。

ところで、メルロ＝ポンティは「音声的所作は、語る主体に対してもそれを聴いている主体に対しても、経験のある一つの構造化、実存のある一つの転調を実現する」(PP225/①316)とする。

聴いている主体においてはこの事態はどのように捉えられるのであろうか。

3．聴く主体

（1）　構えの身体

相手がまさに何かを話しだそうとするとき、聴く主体としての私たちは相手の様子や顔をまずうかがう。そして言葉を待つわけだが、その様子や顔の表情、言いよどんでいる姿、少し真剣になった目つきなどによってまず内容の重み、相手の感情をつかみとり、たとえばただならぬ気配に居ずまいを正し、他のことに忙殺されていた手を休めてからだを相手の正面に向き合わせる。いわば構えの姿勢となって待つのである。その一連の動きは意識して行われるものではない。メルロ＝ポンティはその身体を「潜勢的身体」とよぶ。「それがそこで何かをしなければならないその場所に」(PP 289/②69)あって、しなければならない任務やそのときの状況に応じてたちどころに一つの系として活動を開始できるような身体が、「可能な活動の系としての私の身体であり、その現象的な＜場＞が自分の任務や状況によって決定されるような潜勢的身体(un corps virtuel)」(ibid.)である。

virtuel という言葉は潜在的という意味であるが、秘められた可能性を表現している。つまりまさにその状況においてこれから何かの任務に一体となって取り掛かることができる状態になっている身体ということであり、その身体は任務をすでに予感し、変わっていく状況に対していつでも対応可能な状態にあるような構えの身体ともよべるものである。

真剣に語りだそうとする相手から言葉を受け取る側は、自然にこの構えの身体となって相手の言葉を待ち受ける。そして聴く側がその構えの身体となっていることによって場がすでに形成されているために、語る側の話はその場に応じて導き出されることになる。語る相手のただならぬ様子と話の内容自体はもちろん無関係ではない。真剣に相手に届けようとするときの言葉は、聴く側の構えの身体によって、その話の表情をすでに周囲に漂わせながら引きだされることになるのである。

そして「言葉をつうじての他者の思想の獲得、他者への反省、他者に従って思惟する能力、というものがあるのであって、これがわれわれ自身の思想を豊かにしてゆくのである」(PP208/①294)とされているように、当然聴く側は待ち構えていたところに到来した言葉を通じて相手を理解し、また相手の思想なりそのときの感じ方、考え方を自らに反映させていくわけであるが、逆に自らの構えの身体によって相手の意図を導き出していくこともできるのである。

（2） 聴く主体における「無記名の実存」

それでは聴く主体はどのようなあり方において語る側の言葉を受け取り、自らの変容につなげるというのだろうか。『知覚の現象学』においては「無記名の実存」が他者と自分の身体に住み着くというあり方について次のように述べられている。

「私の身体は他者の身体のうちに己自身の意図の奇跡的延長のようなもの、つまり世界を扱う馴染みの仕方のようなものを見出すのである。以後、ちょうど私の身体の諸部分が相寄って一つの系をなしているように、他者の身体と私の身体もただ一つの全体をなし、ただ一つの現象の表裏となる。そして私の身体がその時々のその痕跡でしかない無記名の実存(l'existence anonyme)が、以後これら二つの身体に同時に住み着くことになるのである。」(PP 406/②218-219)

自分の身体において各器官がある働きをなす際に自然に一つの系となって動くように、他者の身体と自分の身体もただ一つの全体をなすようになり、一つの現象において表裏をなすものになる。この「無記名の実存」はそれ以降他者の身体と私の身体の中に基礎づけられ、そこで二つの身体はいわば共存の身体ともいえるものとなる。前節で確認されたように、実存とは意味を持たなかったものが意味を持つように捉えなおされていくことを可能にする操作であり、身体のなかに己れを実現するものであった。「無記名の実存」に住み着かれた共存の身体において、その身体であるからこそはじめて生まれるような意味が分泌されるのである。

ここで確認されるべきことは、このような「無記名の実存」が住み着いた共存の身体とは、他者の身体と自己の身体とが消え去った第三項の身体を意味しているのではないということである。そうではなくて、他者の身体も自己の身体もそれぞれ独立した個としての身体でありな

がら、さながら協働して一つの系となっている体内のシステムのように働く身体が共存の身体ということである。

相手の言葉を真剣に聴きとろうとする際には、このような「無記名の実存」が住み着いた共存の身体であることが要請されることになる。『知覚の現象学』には障害のために共存の身体となることができない場合には他者の言葉の意味が獲得されないことについて、次のような記述がある。

「（患者にとって）他者の言葉は、正常人におけるような、そのなかをみずからも生きることもできるような一つの意味(sens)の透明な外皮ではなくて、一つ一つ判読してゆかねばならぬ標識である。患者にとっては、人間的事象と同じく言葉もまた、一つの捉え直しまたは投射の動機ではなくて、単に一つの方法的解釈の機会にすぎない。……彼に差し出される幻影は、なるほど分析によって獲得される知的意味づけの方は欠いていないにしても、共存によって獲得される始元的意味づけの方は欠いてしまっているのである。」(PP 155/①224)

なんらかの障害によって相手との関係のなかで共存の身体となることができない場合、共存の身体となることによって初めて自らのなかで捉え直すことができるような言葉がその人に届くことはない。他者の考えていることや感覚が自らのものとして生き生きと自分の周りに現れてくるような意味となることは不可能であり、他者の言葉は単なる読みとくべき記号の塊となってしまう。その人に差し出される幻影、つまり言葉によって知的意味、分節化された意味だけは伝わるとしても、共存の身体となることによって初めて獲得される始元的意味、真の意味を彼に伝えることはできない。

聴く主体は、もしも無記名の実存に住み着かれることがなければ、語る主体の言葉を自ら捉えなおす言葉としては受け取ることができないのである。

しかしながら気をつけなければいけないのは、言葉のやりとりにおいて、聴く側の語る側への没入が称揚すべきことのように解釈されてしまう可能性があることである。真剣に相手に向かいあう構えの身体こそが語る言葉を導き出し、また無記名の実存に住み着かれることが不可欠であるとはいっても、すなわちそれが相手の世界に過度に共感し没入するということが要請されているわけではないということである。自らの内側から捉え直すことができるということが前提となる[8]。

この節における考察を振り返ってみよう。真剣に言葉を語りだそうとする相手から言葉を受け取る側は、構えの身体となって相手の言葉を待ち受けている。そして聴く側がその構えの身体となっていることによって場がすでに形成されているために、語る側の話はその場に応じて導き出されることになる。

聴く主体は、待ち構えていたところに到来した言葉を通じて思想を豊かにし、また相手の思想なりそのときの感じ方、考え方を自らに反映させていくわけであるが、逆に構えの身体によって他者の意図を導き出していくこともできるのである。

そして、聴く主体は、もしも無記名の実存に住み着かれることがなければ、語る主体の言葉を自ら捉え直す言葉としては受け取ることができないが、無記名の実存に住みつかれた共存の

身体とは、話す主体と聴く主体が同一の主体になってしまうということではない。

ここでメルロ＝ポンティの中期以降において展開された記述も確認しておかなければならないだろう。

4．中期以降における言語論からの考察

（1） 共存の身体と間身体性（intercorporéité）

「間身体性（intercorporéité）」はメルロ＝ポンティの現象学において核をなす特徴的な概念の一つとされている。複数の身体がまるで一つの系の個々の器官のようにして働くというような、身体の機能的な共同性を指し示す言葉である。この表現自体は中期の論文「哲学者とその影」（『シーニュ』所収）において「他者と私はただ一つの間身体性の器官」[9]という表現において登場する。しかしさかのぼって前期の『知覚の現象学』においても、前節で確認されたように、この概念につながる「無記名の実存」が住み着いた共存の身体についてはすでに考察されている。

メルロ＝ポンティの間身体性は特に教育学において、母子の癒着的な関係や、あるいは他者との一体感を強調するものとしてそういったありかたを擁護する議論として用いられ、その後、その一体感というものを見直す議論のなかで今度は逆に、自我を喪失し溶解したような状態、他者のない関係性を表すものとして批判的に捉えられてきたともいえるだろう。

しかしながら、間身体性や共存の身体を思惟や行動の基底に置き、相互主観的なありかたのなかで意味がうみだされるといっても、他者の身体が自己の身体と区別のない同一の身体になると述べられているわけではない。

たとえば『知覚の現象学』においても「乗り越えがたい生きられる独我論」(PP 411/②225)があるとされる。わが子を失って悲しむ母親にどれだけ寄り添っても、その悲しみを他者が同じように悲しむことはできない。「たとえわれわれの意識が、それぞれの状況を通して、たがいに交流しあえる共通の状況を構築しようとするにしても、それぞれがこの＜唯一の＞世界を投企するのは、やはりその主観性を地にしてのことなのである。」(PP 409/②222-223)とされているのである。

しかしながらもちろん、完全な「独我論」は否定される。「実存するのは世界内に存在すること」(PP 415/②230)であり、「何ものであることもなく、何事もなすこともなく、暗黙のうちに」(ibid.)生きるということは在り得ないことなのだから、全くの独我論というものは真にはならずに、「それぞれの他人は私にとって、否認しがたい共存のスタイルないし場という資格で存在している」(PP 418/②235)ということになる。

こうした記述に明らかであるように、メルロ＝ポンティにおいて共存は否認しがたいものであることは確かである。しかしながらすでに『知覚の現象学』においても間身体性的な状態としての共存の身体が、自他同一の溶け合った状態というものを指し示すものではなく、またそこにとどまることを称揚するようなものでもなく、ましてや目指されるべきものともされてい

ないことについては再度確認されておくべきであろう。

（2）　自己に立ち戻る変容の道筋

一方、『知覚の現象学』においては共存の身体としてのあり方における対話による変容についてすでに描かれているとはいうものの、共存の身体から先へと進む変容の道筋について必ずしも明確には述べられていない。その点については中期以降、言語への考察が進むなかでさらに豊かに表現されてきたといえるだろう。たとえばソルボンヌにおける講義録のなかに次のような記述がある。

「言語活動とは、主体が自分の手持ちの意味を、まわりでおこなわれている語の使用法に促されて乗り越えていくことだ、という結論が出されます。つまり、言語活動とは超越してゆく働きなのです。…言語活動のうちに、他者との接触を通して自己を獲得してゆく手段を見なければならないのです。」[10]

ここで述べられているように、言語活動とは自分の発する言葉が持っている意味を、受け取る他者との接触を通じて乗り越えていくことである。そうすることによって「自己を獲得していく」というのである。言葉を発する側が、聴く側と共存の身体となった上で、そこから立ち戻るなかで自分の発する言葉の意味を超えていき自己を変容させていくという、いわば共存の身体から先に進んだ変容のありようを示していると考えられる。また一方の聴く主体については『世界の散文』のなかに次のように述べられている。

「コミュニケーションが成功するのは、聴き手が、言葉の連鎖を一つ一つ辿る代わりに、他者の言語学的所作を自分のものとして捉え直し、みずから遂行することによってそれを超出する場合のことでしかないのである。」[11]

ここでは言葉を受け取る側も、言葉一つ一つを受け取って意味を辿っていくというのではもちろんなく、他者の所作的意味をそのまま共存の身体において受け取り、そこから自らに立ち戻って自分のものとして捉え直して超えていく、ということが記されている。自分のものとして捉え直して超えていく、というのは、つまりそのまま納得して受け取り自らの考えにすることもあれば、捉え直してそこから離れることもでき、新たな方向へ進む契機とすることもできるということであるだろう。

そして後期、メルロ＝ポンティの遺稿においてはさらに聴く主体の変容について次のように表現されることになる。

「他者の言語活動が私に語らせ、思考させるのは、それが私のうちに私とは別のもの、私が見ているもの…に対するある隔たりをつくり出し、こうして、私自身にそれを指示するからである。他者の言語行為は、それを通して私が私の思考を見る〔解読用の〕格子をなしているのである。」（…

は原文ママ）[12]

他者からの言葉は、私のなかで今まで見ていたことや考えていたことに対して隔たりを作りだし、捉え直して考えさせる役割を担うものであるとされているのである。他者の言葉は受け取られその言葉に纏わる意味が伝えられるだけではない。それを契機として聴き手自らの中に、以前の自分とのあいだに隔たりが作られる。つまり、以前の自分の感じたことや考えも見据えながら、それと他者の言葉を契機として新たに自らのなかに生まれ出たものとの差異、隔たりを捉えることができ、それによって自らが変容するということである。

中期以降の記述においてより豊かに表現された自己変容の契機としての言葉についてひとまず整理しておくことにする。

話す主体は、聴く主体と共存の身体となった上で、そこから立ち戻るなかで自分の発する言葉の意味を超えていき自己を変容させていく。聴く主体も、言葉一つ一つを受け取って意味を辿っていくというのではもちろんなく、他者の所作的意味をそのまま共存の身体において受け取り、そこから自らに立ち戻ってその意味を自分のものとして捉え直して超えていく。つまり受け取った言葉に納得して自らの考えにすることもあれば、そこから離れることもでき、また新たな方向へ進むこともできるということである。また他者の言葉はそれを契機として聴き手自らの中に、以前の自分とのあいだの隔たりを作る。つまり聴き手は他者の言葉によって以前自分の感じたことや考えも見据えながら、それと新たに自らのなかに生まれ出たものとの差異、隔たりを捉えることができ、それによって自らが変容するということである。

したがって、当然、言葉を発する側、受けとる側双方の主体に同一の変容が到来するわけではない。意味の捉え直しはそれぞれの主体において、各自が築き上げてきた自己の内側においてなされる。双方ともにそれぞれのあり方で転調し、変容するのである。

5．　結びにかえて――言葉による自己変容

言葉を届けるとはどういうことなのだろう。

何かを指示し伝えるために交わされている日常的な場面において、そのことが問題になることはほとんどない。しかしながら、何か大切なことを伝える場面、たとえば患者が医師に自らの病状を訴えるとき、誰かに自分の窮状や想いを伝えたいとき、言葉が届くかどうかは決定的に重要になってくる。

もちろん様々な教育の現場においても、たとえば教える側から教わる側へ言葉が届くことについての重要さ、あるいは逆に子どもたちから教師に言葉が届くことの重要さについてはすでに多く語られている。

だがどのような場面においても、その言葉が本当に相手に届いているのかどうかを確かめるすべは、実はない。相手の反応が自分の言葉を完全にふまえたうえでのものかどうかは、確実にはわからないのである。たとえ言葉がきちんと届いていることが確信されるときがあったとしても、実は聴く側がすでにもっている枠組みのなかに吸収されてしまうだけの場合もある。

あるいは、相手の反応には語る側には想像することもできない意図が働いているのかもしれず、翻ってその反応を、今度は語る側がしっかり読み取れているのかどうかも確かめようがない。言葉を投げかけている側も、自分が思っているようには言葉が届いていないことが端的に感じられて、それを不満に感じて再び投げ返すこともあるが、その反応をそのまま受け取ることもある。

とするならば、言葉を届けようとするというのは、実際にはどういう事態なのであろうか。それはもしかしたら何かを正確に伝える、あるいは説得するということにとどまらない、というよりはむしろ実は何か違う次元のできごとなのではないだろうか。メルロ＝ポンティにおいてはこの事態が自己変容の契機として捉えられているのではないか、ということを検証することが本稿の趣旨であった。メルロ＝ポンティは次のように語る。

「なによりも私が意思伝達をもつのは、＜表象＞とか思惟とかに対してではなく、語っている一人の主体に対してであり、あるひとつの存在仕方に対してであり、彼の目指す＜世界＞に対してである。他者の言葉を発動させた彼の意味的指向は、はっきりと顕在化した思惟ではなくて、充足されることを求めているある一つの欠如態であったが、それとまったくおなじように、この指向を捉える私の作用の方も、私の思惟の操作ではなくて、私自身の実存の同時的転調であり、私の存在の変革なのだ。」（PP214/①301-302）

この「実存の転調」が、本稿が考察してきた言葉による自己変容であるのだろう。言葉を届けようとする側は、何よりも一人の他者に向かって身を開き、語りかける。聴いている側は構えの身体になることによって、思惟によってではなく、何かを捉え自らを充たそうと待ち構えた欠如態となっている。語る側はその待ち受けている側の指向を捉えつつも、何か思惟することによって言葉を発しているのではない。聴き取る側が、予感しつつ到来する言葉を受け入れることによって変わっていくのと同時に、語る側も自分が発する言葉によって自らの実存を転調させ、変容していく。

前節までに考察されてきたことを上記の変容のあり方に重ねて振り返ってみることにしよう。

第一に、事実状況の引き受けとして、事実や偶然を不断に己れのものとして捉え直していく運動である実存は、身体において己れを実現しようとするものである。したがって言葉を発し、受け取る際にも、真剣に届けようとする言葉、聴き取ろうとする言葉を契機としてそれぞれの実存はつねに捉え直されていくことになる。

第二に、真剣に言葉を届けようとする側は、何よりも相手に対して真摯に向き合う。相手とすでになんらかの共通の言語世界にある上で、言葉の概念的な意味だけではなく、むしろ表情や情動そのものを含みこんだ所作的意味を分泌しながら真の言葉、「語る言葉」を紡ぎだしていく。

第三に、真剣に言葉を受けとめる側は、構えの身体となって言葉を聴きとろうとし、いわば一つの欠如態となって言葉を待つ。聴き取ろうとするその真剣な構えの身体によって言葉が導き出されるともいえるが、聴く側は相手の言葉によってそれ以前の思想をすっかり捉え直すことになる場合さえある[13]。

第四に、しかしながら実は、言葉を届けようとする主体と聴きとろうとする主体の、それぞれ個々でありながらも、互いの意図が自分の意図となってしまうような間身体的なありかた、つまり「無記名の実存」が双方に住み着いた共存の身体になることによってこそ、「実存の転調」としての変容は起こる。ただこの共存の身体や間身体的なあり方とは、それぞれの身体が消え去った同一の第三の身体ではないということは今一度確認されるべきことである。

第五に、話す主体は、聴く主体と共存の身体となった上で、そこから立ち戻るなかで自分の発する言葉の意味を超えていき自己を変容させていく。聴く主体も、他者の所作的意味をそのまま共存の身体において受け取り、そこから自らに立ち戻ってその意味を自分のものとして捉え直して超えていく。受け取った言葉に納得して自らの考えにすることもあれば、そこから離れることもでき、また新たな方向へ進むこともできるということである。また他者の言葉はそれを契機として聴き手自らの中に、以前の自分とのあいだの隔たりを作る。聴き手は他者の言葉によって以前自分の感じたことや考えも見据えながら、それと新たに自らのなかに生まれ出たものとの差異、隔たりを捉えることができ、それによって自らが変容するということである。つまりそのつどの状況に合わせて相応しい行動を自ら選ぶことができる。それによって自らの変化に気づくこともできるということにもなる。そして自らの変化に気づくことによって、さらに相手への対応の仕方も変化していくことにもなるだろう[14]。

第六に、したがって、当然、言葉を発する側、受けとる側双方の主体に同一の変容が到来するわけではなく、意味の捉えなおしはそれぞれの主体において、各自が築き上げてきた自己の内側においてなされる。双方ともにそれぞれのあり方で転調し、変容するのである。

「語る（話す）」という言葉は、ラテン語で loquor といい、受動態の形でありながら能動態としての意味をもつ特殊な動詞の一つであるという[15]。言語学者のバンヴェニストはそれを中動態という、インド＝ヨーロッパ語族においては受動態以前に能動態に対立していた、古くからある動詞の形の説明に用いている。中動態は外に働きかけるだけのものとしての能動態と異なり、働きかけるのではあるが、その結果が自らに戻って作用することになるような動詞の形である。能動態が主語の外で行われる過程を示すのに対して、中動態においては主語は過程の内部にあるという[16]。まさにメルロ＝ポンティにおいて言葉は、話す主体も聴く主体も働きかけるのだが、主体の外に働きかけるだけのものでも受け取るだけのものでもなく、中動態のようにその結果がつねに主体自らに立ち戻るものとして、自らがその過程にあるような自己変容をもたらす契機として考えられているといえるのではないだろうか。

---

[1] インタビュー分析において、ナラティヴ・アプローチの不十分さを指摘しながらメルロ＝ポンティの言語論を手がかりとしてインタビューにおける語り手自身の変化を捉えることで語りの理解を深めようとする興味深い研究がある（遠藤野ゆり「インタビューにおけるナラティヴの現象学的考察―メルロ-ポンティの言語論を手がかりとして―」『人間性心理学研究』第 26 巻第 1・2 号、2008 年）。

[2] たとえばルフォールはメルロ＝ポンティの哲学において考慮されていないのは、他者、第三者、他者性の代表であるとし（Lefort , Claude,"Flesh and Otherness", in *Ontology and Alterity in Merleau-Ponty*, Northwestern Univ. Press, Evanston, Illinois, 1990.）、またレヴィナスは、メルロ＝ポンティの言葉は他者への問いかけがないとする（Lévinas, Emmanuel, *Totalité et Infini Essai sur l'éxtriorité*, (1.ed.M.Nijhoff, 1961)Kluwer Academic, Le Livre de

Poche, 1992.)。ただし、こうした批判にもそれぞれ留保がなされており、単にメルロ＝ポンティには他者がないとする批判とはなっていないことには注意が必要である。

[3] 屋良朝彦『メルロ＝ポンティとレヴィナス――他者への覚醒』東信堂、2003年。

[4] 中田基昭『表情の感受性―日常生活の現象学への誘い―』東京大学出版会、2011年。特に第2章、第2節。

[5] メルロ＝ポンティにおける言葉については言語論として多くの先行研究があり、そのほとんどが前期、中期、後期に分けて考察している。その変遷について詳述はできないが、本稿においては少なくとも変容の契機という角度から照射した場合には、メルロ＝ポンティにおける言葉は前期から後期まで大きな変化はないものの、前期『知覚の現象学』において示唆されていた内実が中期以降の言語論においてさらに豊かに表現されていったものと考えている。

[6] Merleau-Ponty, Maurice, *Phénoménologie de la perception*, Paris, Gallimard, 1945. p.212 邦訳『知覚の現象学・１』竹内芳郎・小木貞孝訳、みすず書房、1967年、299頁。以下、同書からの引用はPPと略しページ数を併記し、/（スラッシュ）の後に邦訳１（①）、２（②）の頁数を併記するが、一部改訳している。（なお、後半の邦訳は『知覚の現象学・２』竹内芳郎・木田元・宮本忠雄訳、みすず書房、1974年。）

[7] メルロ＝ポンティは、ここで語られているような言葉は「原初的な言葉にしかあてはまらない」(PP209/①295)とするが、ここではその「原初的な言葉」を、真剣に届けようとする言葉、として論を進めることになる。

[8]「私の歴史のなかでの出来事とみなされたある言葉やある思想が私にとって意味を持ってくるのは、ただ私がその意味を内側から捉え直す場合だけである」(PP458/②291)

[9] Merleau-Ponty, Maurice, *Signes*, Gallimard, Paris, 1960.p.213『シーニュ・２』竹内芳郎監訳、みすず書房、1969年、18頁。

[10] Merleau-Ponty, Maurice, *Merleau-Ponty a la Sorbonne resume de cours 1949-1952*, Cynara, Grenoble, 1988.『意識と言語の獲得　ソルボンヌ講義１』木田元・鯨岡峻共訳、みすず書房、1993年、76頁。

[11] Merleau-Ponty, Maurice, *La prose du monde*, Gallimard, 1969. p.41『世界の散文』滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、1979年、48頁。

[12] Merleau-Ponty, Maurice, *Le visible et l'invisible, suivi de notes de travail*, Paris, Gallimard, 1964. pp.277-278 『見えるものと見えないもの』滝浦静雄・木田元訳、みすず書房、1989年、325頁。

[13] メルロ＝ポンティは、「時には一つの新しい思想にまで結実し、それによって以前のわれわれの思想がすっかり手直しされること」となると語り(PP208/①293)、他者から発せられる言葉によって受け取る側の思想がすっかり変容させられてしまう事態もありうるとしている。

[14] 玉地は、医療現場における言葉が失われた患者とのコミュニケーションについて、現象学とともに論じつつ、「自分からの問いかけや働きかけに、つまり自分の変化に鈍感になるのではなく、自分に起こった変化にも繊細になりその変化をも含みこんだものを踏まえつつ、相手への応対を生み出していくべきであろう」と語っている（玉地雅浩「身体が言葉を失ったとき―非言語的なやり取りから生まれる身体の意味について―」『医療・生命と倫理・社会』（オンライン版）vol.9, No.1/2、2010年）。

[15] 中岡成文『試練と成熟―自己変容の哲学―』大阪大学出版会、2012年、149頁。

[16] エミール・バンヴェニスト『一般言語学の諸問題』みすず書房、1983年、167－173頁。

（臨床教育学講座、博士後期課程３回生）

（受稿2012年9月3日、改稿2012年10月31日、受理2012年12月27日）

Words in Conversation as a Way for Transformation of Beings according to Merleau-Ponty

KARASAWA Ikuko

How can we convey our real ideas and feelings to others, especially on occasions where we wish to pass them on seriously ? In fact, we cannot know whether we have succeeded in passing on our real thoughts to others. Then, what actually occurs in conversation? According to Merleau-Ponty, words in conversation are a way for transformation of beings. We can change ourselves by words in conversation. However, we must not think that only the conceptual meaning of words can change ourselves. According to Merleau-Ponty, a gestural meaning that includes feelings works more than a conceptual meaning of words in conversation. In addition, another person with a “potential body” leads one’s intention to give real words. The state of intercorporeality will be the key to synchronizing change of ourselves in conversation. However, we must pay sufficient attention to the fact that we are independent even in the state of intercorporeality. We will return from the state of intercorporeality to ourselves and could change ourselves by recapturing the meaning of words in conversation.